

[論文]

# 日本人大学生の日本語語彙量測定を試み

田島ますみ  
佐藤尚子  
橋本美香  
松下達彦  
笹尾洋介

- 〈目次〉
- 1 はじめに
    - 1.1 大学生の語彙力の問題
    - 1.2 語彙量の測定
  - 2 語彙サイズテストの開発
    - 2.1 非母語話者対象の語彙量テスト
    - 2.2 テストレベルの拡張
    - 2.3 語彙サイズテストの特徴
    - 2.4 語彙サイズテストの形式
  - 3 テスト実施概要
  - 4 実施結果と考察
    - 4.1 語彙レベルに関する結果と考察
    - 4.2 推計既知語数
    - 4.3 受験者の属性に関する結果
    - 4.4 上位層と下位層で正答率に顕著な差の出た語
  - 5 まとめと今後の課題

# 1 はじめに

## 1.1 大学生の語彙力の問題

これまで、日本人大学生の日本語力の問題についてはさまざまな点が指摘されている。昨今では漢字はもちろんのこと、ひらがな・カタカナの正確な表記もおぼつかない大学生がいたり、構文や助詞の用法が誤っている文を書く大学生がいたりする。文章を書く力に限らず、文章から情報を読み取る読解力、日本語使用を含めたコミュニケーション能力など、数々の問題が認識されてきた。その中で、語彙力が低いという点は以前から指摘されており、日本語の授業担当者のみならず大学関係者の間では共通認識と言える問題である。

大学生たちは、均質な仲間同士では新奇な言葉も使いこなすコミュニケーションを取っているが、日常会話のレベルを超えて書き言葉や文献に使用される語彙に関しては、教員側が驚くようなレベルで知らない、理解していないということがある。原因の一つには、活字を読む習慣の不足が挙げられるだろう。

文化庁の2013年度「国語に関する世論調査」<sup>(1)</sup>では、42.7%の16～19歳が1か月に1冊も本を「読まない」と回答している。20代では40.5%である。2009年度の国語世論調査<sup>(2)</sup>では新聞を読む頻度が問われたが、「余り読まない」「全く読まない」と答えた16～19歳は合わせて57.1%であった。20代でも52.7%が「余り読まない」「全く読まない」と回答している。高等学校卒業者の大学・短大進学率が5割を超えた現在、本や新聞を読むこと<sup>(3)</sup>に慣れていない大学生はかなりの割合で存在していると言える。

実際、全国大学生活協同組合連合会が2014年度に全国の国公立および私立大学の学部学生に行った調査（回収数9223名）では、1日の読書時間は平均31.7分、全く本を読まない学生の割合は40.9%<sup>(4)</sup>であった。これは、国語世論

調査で本を読まないと答えた割合と近似する結果であり、現在の日本では約4割の若者が本を読まないという状況を示唆する結果である。さらに、新聞については橋本・見尾（2012）が医療系短期大学の1年生を対象とした調査で、72.5%の学生が新聞を読む習慣のなかったことを報告している<sup>(5)</sup>。

本や新聞を読まない学生の語彙力が日常会話レベルにとどまって大学の学びに必要なレベルに達していないということが考えられる。実際、高校1年生を対象とした調査ではあるが、澤口・瀬戸（2015）が文章読解のつまずきの要因として、読書量の低下、語彙力不足、意欲を挙げている報告もある<sup>(6)</sup>。語彙力の不足は大学の授業の理解、教職員とのコミュニケーションはもちろんのこと、教科書や参考書、文献資料の読解にも支障があるであろう。

このような状況に対し、例えば、日本リメディアル教育学会では2009年度全国大会で語彙力をテーマとしたシンポジウムが開催され、それをもとに『リメディアル教育研究』6巻1号<sup>(8)</sup>（2011）では、語彙力を中心とした日本語リメディアル教育について特集が組まれている。また、IRT診断テストの日本語は、語彙の力を測るテストであり、大学生の日本語力を測るテストとして活用されている<sup>(10)(11)(12)</sup>。語彙力は日本語力の中でも主要な基本要素であり、大学生の語彙力は大きな問題として議論されてきている。

## 1.2 語彙量の測定

問題として取り上げられるものの、語彙力を数量的に議論することはあまりなされていない。どの程度の語彙量が標準であり、大学の学びに問題が出てくるのはどの程度の語彙量の大学生たちなのか、といった議論は、日本語母語話者の大学生を対象とした場合、管見の限り見られない。

母語話者対象の語彙量の数量的議論がほとんどなされていないのは、日本語の語彙量が膨大であり、各語のレベルも考慮しつつ、その個人差やグループ差を正確に測定することが難しいことが一因だろう。第二言語の場合であれば、語彙も限定されてくるが、母語話者を対象とした場合、異なり語数50万語を超える日本語の語彙<sup>(11)</sup>に対して、個人の語彙量をどのように測定、評価

するのかなかに難しい問題である。

他方、第二言語の場合であれば語彙の数量的把握は珍しいことではない。たとえば、日本語学習者を対象とした日本語能力試験では、改定前の旧試験で出題基準として語彙レベルの目安を1級で10000語、2級で6000語というように数値で示していた<sup>(13)[2]</sup>。第二言語としての日本語教育では、語彙レベルを数量的に考えること、またそれぞれの語が初級か上級かというような語彙レベルを意識することは、通常行われることである。

本研究グループでは、第二言語としての日本語教育で開発されてきた語彙量を測るテストを母語話者にも応用できないかということを考えた。テストの出題範囲を拡張してテスト問題を作成し、母語話者である日本人大学生に実施して、適切に語彙量を測定できるのかどうかを検討した。その結果を報告する。

## 2 語彙サイズテストの開発

### 2.1 非母語話者対象の語彙量テスト

今回、もとにした非母語話者対象のテストは、松下(2012)が開発した「日本語を読むための語彙量テスト」<sup>(14)</sup>である。このテストでは、「日本語を読むための語彙データベース」<sup>(15)</sup>(松下2011)を利用し、テスト項目を使用頻度の高い15000語の中から100語につき1語の割合で選んでいる。「日本語を読むための語彙データベース」は、書籍約2800万語とインターネットフォーラム約500万語の計約3300万語のコーパスにおいて、各語の使用頻度に分散度をかけあわせて順位付けしたものを調べて作成したものである。書き言葉のコーパスに基づいて作成されたデータベースであり、話し言葉の頻度は反映しないため「日本語を読むための」データベースと名付けている。

## 2.2 テストレベルの拡張

今回は母語話者用に問題数をそのまま150問として範囲を使用頻度上位15000語から30000語にまで広げることにした。すなわち、使用頻度順のリストの200語につき1語を選んでテスト項目とした。150項目の半分の15000語レベルまでは、もとにした「日本語を読むための語彙量テスト」から選んだものである。残りの75問を、頻度順位15001語～30000語から選んだ。

範囲を30000語としたのは、今回は一般語彙についての知識を測るテストにするとしたためである。データベースを使用頻度順に見ていった場合、上位30000語を超えると、「一般」とは言えないような特殊な語彙や専門的な語彙が増える。また、10000語を超えるレベルでは語の使用頻度は非常に低く、20000語レベルでも30000語レベルでも頻度にほとんど違いはないので、30000語までの測定である程度差が出ると予測した。

なお、もとにした非母語話者用のテストの名称が「日本語を読むための語彙量テスト」であるため、紛らわしさを避けることを目的に、今回開発した母語話者用テストは、本稿では「語彙サイズテスト」と呼ぶこととする。

## 2.3 語彙サイズテストの特徴

このように、今回のテストの大きな特徴は、語彙のレベルの根拠を使用頻度としたことである。語彙のテストを作成する難しさの一つに、どの語がどの程度のレベルの語であるか、明確な基準がないことが挙げられる。たとえば、「習得」という語が中学生レベルなのか高校生レベルなのか、あるいは大学生レベルなのか、判定は非常に難しい。この問題に対して、コーパスにおける使用頻度順位は客観的なわかりやすい指標を提供してくれる。使用頻度は社会的ニーズであり、学習ニーズを反映すると考えられ、また第二言語習得においては<sup>(16)</sup>おおよそ頻度順に習得が進むことが確かめられている。使用頻度は語彙のレベルを表す明確な指標として妥当だと考えられる。

また、語彙サイズテストは目標語を知っているかどうかを問うテストであ

る。目標語の意味がわかり、日本語の文章を読む時に支障がないかをテストする。各問題における正解以外の三つの選択肢は、目標語と頻度レベルが同じ語を三語選び、その簡単な定義とすることを原則として作成した。語彙テストでよくある形式としては、類義語の中から正解を選ばせ、語彙の使い分けができるかどうかを問うものがあるが、このテストは目標語を知っているかどうかを問うもので、紛らわしい選択肢は入れなかった。目標語を知っているのに、あいまいな選択肢のために間違えたということのないよう、いわゆる「ひっかけ問題」というようなものがないよう配慮した。

もう一点、特徴であり、大きな利点であるとも考えている点は、母語話者・非母語話者を問わず、多様な背景を持つ日本語使用者の語彙力を一元的に測定できることである。もともとは非母語話者対象のテストを母語話者にも使えるように出題範囲を広げたという作成方法であり、その広げ方も使用頻度という客観的な指標に基づいていて、母語か非母語かという観点は含まれていない。母語話者への国語教育であっても第二言語としての日本語教育であっても使えるテストである。

この点は今後、ますます重要となる大きなメリットではないかと考えられる。従来、日本語の教育に関しては、対象者が母語話者か非母語話者かで「国語教育」「日本語教育」といった明確な区別がなされてきた。無論、その区別の重要性に異を唱えるつもりはないが、昨今の状況を見ると、社会のグローバル化に伴い、大学入学者の言語的背景は多様化してきている。帰国子女であったり、外国人だが中学・高校の時に来日していて留学生枠で入学してこない学生であったり、あるいは日本生まれ・日本育ちであるが親、家庭の使用言語が日本語ではないなど、今までの日本人大学生か留学生かといった2分類ではとらえきれない、さまざまな状況が生じてきている。そのため、これまでの、たとえば留学生枠入学の学生に対し第二言語としての日本語科目を提供するというカリキュラム編成では対応しきれなくなることが予想される。留学生枠で入学した学生だけに日本語に関しての学習支援をするのではなく、留学生でなくても日本語力が十分ではない学生を把握し、日本

語のリメディアル教育的な授業や支援を行えることが望ましい。そのためには、日本語が十分ではない学生を特定するツールが必要である。

このような状況下で、日本語使用者の語彙力を一つのスケールで測定するテストは、母語・非母語の区別を問わずに一律に実施するプレイスメントテストとして使うことができる。もちろん達成度や教育効果の評価ツールとしても、使用可能である。多様化する大学生の言語的背景に対応するテストとして大きな利点があると考ええる。

## 2.4 語彙サイズテストの形式

テストの形式は「日本語を読むための語彙量テスト」を踏襲した。このテストが参考にしたのは、英語の語彙サイズテスト<sup>(17)</sup>であり、正解の意味の手がかりを最低限にする非定義文に、テスト項目である目標語を埋め込み、その定義を四つの選択肢から選ぶ形式である(図1)。漢字力の優劣が影響しないように漢字にはすべて振りがなをつける。ただし目標語にはつけない。150問を40分で解答する。配点は1問1点の150点満点である。出題順による正答率への影響を考慮し、出題順をランダムにした二つのバージョンを作成した。

[6000語レベル]

礼儀：あの人は礼儀（らいぎ）を知らない。

- 1) おおよその内容（ないよう）をまとめたもの
- 2) 人間関係（にんげんかんけい）を守るための行動様式（こうどうようしき）
- 3) ものを大切に（たいせつ）思う気持ち（おもいきもち）
- 4) 理論（りろん）とは異なる現場（じやんば）の仕事（しごと）

\*実際の問題とは異なる

図1 語彙サイズテスト問題例

### 3 テスト実施概要

テストは、2014年4月中旬から5月初旬にかけて、3大学の1年次配当日本語科目の授業で授業時間内に実施した。各大学で各バージョンがほぼ半数となるように行い、500名以上が受験した。このうち、結果使用の同意書に署名のないものや解答の不完全なもの、また統計学的にみて、まじめに受験していないなど解答パターンに問題があると判断される受験者（Rasch outfit  $t > 2.0$ ）を取り除いた458名分の解答を分析対象とした。

受験者の学年は458名中450名が1年生で、ほか8名が再履修クラスで受験した2年生から4年生である。年齢は18歳から27歳にわたるが、平均19歳1か月（標準偏差12.1か月<sup>[3]</sup>）で、性別は男性333名、女性124名である。母語はすべて日本語で、国立大生143名（文系、理系の各3学部、計6学部）、私立大生315名（文系、理系各1学部、計2学部）、専門分野は人文・教育系57名、社会科学系249名、理工系45名、生物・医学系107名である。

### 4 実施結果と考察

実施の結果、二つのバージョンの平均値にはきわめて小さな効果しか検出されなかった（ $r=0.005$ ）ため（表1）、出題順の正答率への影響は無視できる程度であると考えられる。テスト結果の信頼性（クロンバック  $\alpha$ ）は0.916で、概ね内的一貫性のあるテストであるといえる。

#### 4.1 語彙レベルに関する結果と考察

二つのバージョンを合わせた結果は、平均点が150点満点中の135.2点（SD=10.5）であった。図2は5点ごとに区切って各得点帯における人数分布を示したものである。平均点が高く、高得点者も多い。平均値に標準偏差を足した値は145.6であった。平均点に標準偏差を足した点が、取りうる最大



表 1 語彙サイズテスト各バージョンの統計量

	人数 (名)	平均 (点)	標準偏差 (点)	検定結果, 効果量
バージョン A	241	135.15	11.37	$t = -.107, df=456, p = .915$
バージョン B	217	135.26	9.28	効果量 $r = .005$

値を超えている場合、天井効果があるとする簡易な手法に従えば、天井効果が認められるレベルに近い結果であった。使用頻度30000語レベルでは母語話者には十分ではなく、さらに頻度の低い語彙レベルまで問題を広げる必要のあることが示された。

高得点者が多く、最高得点は148点であったが、最低得点は74点で、得点の低い者は一定程度いた。平均点から標準偏差の値を引いた点数(124.8点)よりも低い得点だった下位層は458名中62名であった。図2を見ると、分布の形はかなり右側に偏ってはいるものの、左側の低得点へ向かっては人数が段階的に減っている。このことから、より難度の高い項目を追加することによって母語話者対象であっても適切に機能するテストとなる可能性が示唆される。

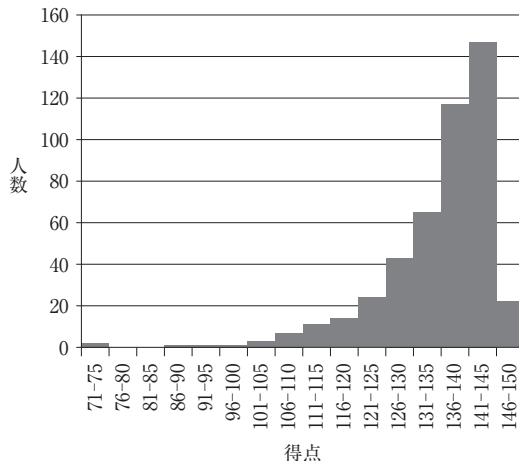


図 2 語彙サイズテスト得点人数分布

## 4.2 推計既知語数

このテストは前述のようにデータベースから使用頻度順に200語に1語の抽出で作成している。得点は、1問=1語につき1点であることから、「テストの得点×200語」がその学生の推計既知語数となる。表2はテストの得点から推計する既知語数を2000語ごとに区切って、各レベルの人数分布を示したものである。

下位層の上限である124点に相当するのは24800語となる。この中でも特に低い下位5名は、得点が74点から98点で、推計語数は14800語から19800語である。この語彙量のより具体的なイメージを持つために、非母語話者を対象とする日本語能力試験を参照しよう。

上記低得点者の推計語数は日本語能力試験の最上位レベル(N1)にほぼ相当する。<sup>(18)</sup> 1.2節で注記したように日本語能力試験は2010年に大きく改定された。現行のN1レベルは旧試験1級とほぼ同じとされ、出題基準の構築にあたって組織された漢字表・語彙表部会では「実際に留学生を指導している教師たちも、日本で大学生活を送るには1級の語彙約1万では足りない、ということを実感している」ことなどを踏まえ、日本語学習者の理解語彙の目安を「約10,000~18,000の語が必要である」としている。<sup>(19)</sup> 今回の語彙

表2 テスト得点による推計既知語数レベル別人数

得点 (点)	推計既知語数 レベル (語)	人数 (名)
71- 80	14001-16000	2
81- 90	16001-18000	1
91-100	18001-20000	2
101-110	20001-22000	10
111-120	22001-24000	25
121-130	24001-26000	67
131-140	26001-28000	182
141-150	28001-30000以上	169
総計		458

サイズテストにおける下位5名の推計既知語数はほぼこのレベルと言える。

N1 認定の目安の一つは「幅広い話題について書かれた新聞の論説、評論など、論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章などを読んで、文章の構成や内容を理解することができる」となっていることを見れば、下位5名は大学での学びについていけるレベルにはあると考えられる。しかし、逆に、母語話者であるにもかかわらず、非母語話者が論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章を理解するのに必要とされる最低限度の語彙量しかないと見ることがもできる。

さらに、非母語話者は母語での語彙量はこれよりも多いと考えられ、論理的・抽象的思考が第二言語としての日本語ではできなくても母語ではできる可能性がある。日本語能力試験のN1レベルだからと言って母語話者である日本人大学生の語彙量として十分であるかは、今回の結果だけでは論究できるものではないが、不十分であるおそれは否定できない。今後の調査研究が望まれる。

### 4.3 受験者の属性に関する結果

天井効果が観察される得点分布に近かったテストであることを踏まえた上で、受験者の属性に関する結果も報告しておく。

性別には有意差があった ( $t(353.95)=4.80, p<.001$ ) が、効果量は小さい ( $r=.247$ )。表3に示したように、女子のほうが男子より平均点が4点以上高く、また点数のばらつきが少なかった。ただし、大学ごとに見ると、3校のすべてで男女間に有意差はなかった。

年齢については、表4のように、18歳から27歳の間で年齢が上がるごとに、平均点はゆるやかに上昇しており、弱い相関があった ( $r=.21, p<.01$ ) が、今回は1年次配当クラスでテストを実施しているため、年齢のサンプルに偏りがある。サンプル数を増やして調査すれば、より強い相関が出る可能性はある。年齢とは別に学年による違いも見したが、有意差は見られなかった。

表3 大学別・性別の得点結果

大学	性別	人数 (名)	平均 (点)	標準偏差 (点)
A大	女	61	141.46	3.40
	男	82	141.85	3.61
B大	女	33	138.53	5.09
	男	74	139.67	5.89
C大	女	32	131.77	9.07
	男	198	128.23	11.90
全体	女	124	138.28	6.99
	男	333	134.05	11.28

表4 年齢別得点結果

年齢 (歳)	人数 (名)	平均 (点)	標準偏差 (点)
18	284	133.44	10.95
19	87	138.13	10.08
20	38	138.16	7.88
21	23	139.13	6.11
22	5	140.20	1.83
23	2	140.00	0.00
24	1	141.00	—
27	1	147.00	—
全体	441	135.22	10.51

この他の結果としては大学間で平均点に有意差が認められるということがある。詳細は記載を控えるが、下位層の大半は3校のうちの1校に集中し、語彙量が日本語能力試験N1レベル相当と推定された前述の5名の学生もこの1校に全員含まれている。今回の結果からは、語彙量に問題があると考えられる日本人大学生はどの大学にも一定数いるというよりは、あるレベル以下の大学に偏在する可能性が示唆された。

#### 4.4 上位層と下位層で正答率に顕著な差の出た語

テストの各項目についての詳細な分析は稿を改めたいが、リメディアル教

表5 上位層と下位層で正答率の差が大きかった語

項目	上位層正答率— 下位層正答率	上位層 正答率	下位層 正答率
ルーチン	77.42	100.00	22.58
起債	75.81	100.00	24.19
酉	73.52	96.10	22.58
白書	66.36	85.71	19.35
由緒	64.83	98.70	33.87
グルコース	64.83	98.70	33.87
つくり	64.79	92.21	27.42
気弱 (な)	59.95	92.21	32.26
阿鼻 (叫喚)	59.64	93.51	33.87
伺候 (する)	59.32	94.81	35.48
中葉	58.38	98.70	40.32
リース (する)	56.91	71.43	14.52
地団駄	54.84	100.00	45.16
百花 (繚乱)	53.77	84.42	30.65
勅令	51.61	100.00	48.39
氏神	51.45	74.03	22.58
戦役	50.00	100.00	50.00
字義	49.96	93.51	43.55
符合 (する)	47.09	98.70	51.61
切望 (する)	46.77	100.00	53.23

育の観点から、得点が低かった学生はどのような語を間違えているのかについて報告しておく。

表5はテスト得点の上位層と下位層で正答率に顕著な違いが出た20語である。下位層を4.1節で述べたように124点以下の62名とし、上位層は、下位層と同様の方法で線引きをすると22名となって極端に人数が少なくなってしまうため、下位層の62名に近い人数の上位77名(144点以上)とした。テスト項目それぞれについて、上位層・下位層の平均正答率を出し、上位層正答率から下位層正答率を引いた差が大きい順に上位20語を示してある。

これらは、「ルーチン」「グルコース」「字義」などややアカデミックな専門語彙に近いもの、「起債」や「白書」といった時事問題・ニュースなどで使用される社会的な用語のほか、「酉」「由緒」「気弱(な)」など文芸書の類で使用されることが多いものであった。「酉」「由緒」「阿鼻(叫喚)」など、

表6 上位層と下位層で正答率の差が小さかった語

項目	上位層正答率— 下位層正答率	上位層正答率	下位層正答率
(会議)室	0.00	100.00	100.00
学者	0.00	100.00	100.00
ミス(する)	0.00	100.00	100.00
修理(する)	0.00	100.00	100.00
転勤(する)	0.00	100.00	100.00
雑談(する)	0.00	100.00	100.00
直行(する)	0.00	100.00	100.00
共犯	0.00	100.00	100.00
炊飯	0.00	100.00	100.00
満タン	0.31	98.70	98.39
ひがみ	1.38	14.29	12.90
やっと	1.61	100.00	98.39
情熱	1.61	100.00	98.39
四国	1.61	100.00	98.39
センス	1.61	100.00	98.39
時給	1.61	100.00	98.39
バッファロー	1.61	100.00	98.39
怪獣	1.93	98.70	96.77
対決(する)	2.24	97.40	95.16
球形	3.23	100.0	96.77

漢字の読み方が難しいものも入っている。使用頻度順位はすべて10000語を超えるレベルの語であった。

一方、表6は上位層と下位層で正答率の差がなかった、もしくは小さかった上位20語を示したものである。そのうち9語は、上位層も下位層も正答率は100%で差が出なかった。すべて日常生活で使われるような語彙で、半数の10語は使用頻度順位で言っても10000語未満のレベルに入ってくるものであった。20番目の「球形」がやや学術的ではあるものの、意味的には単純で、抽象的で意味がわかりにくいというような語ではない。11番目の「ひがみ」は、全体の正答率が90.14%の中で上位層も下位層も10%台の正答率なので、テスト問題自体に問題があるとして除いてもいいが、これにしても日常生活レベルで使われる語である。

まとめると、日常生活で頻繁に使われる語彙については上位層・下位層の

差はあまりなかったが、専門語彙に近いような語や、社会問題への言及で使われる語、文芸書などで書き言葉として使われることが多い語は上位層に比べて下位層の正答率が低かったと言える。この結果は、今までの指摘や調査のとおり、語彙力の問題には読書量の少なさが関わっていることの証左になるとともに、社会への関心の低さも語彙量貧困と関連があることを示している。

## 5 まとめと今後の課題

以上、今回作成して実施した使用頻度30000語レベルのテストは母語話者には簡単すぎるという結果であったので、今後の課題としてはまず、より低頻度の語彙にまで出題範囲を広げて語彙量を測定し、出題する語彙のレベルの適正範囲を検証することが必要になる。得点の人数分布で示唆されたように、テスト作成の方向性に問題はないだろう。問題は出題する語彙の範囲をどこまで広げるかという点だと考える。

また、リメディアル教育という観点からは、簡単すぎると結論づけられたテストでも低得点者が存在し、これらの学生は抽象的な文章を読んで理解するための最低限度程度の語彙しか知らないおそれがあることが示唆された。そのような学生層は「上位校」と呼ばれるような大学には存在せず、特定の大学に偏在していることも示された。ただし、テスト結果は問題の短文や選択肢を読む読解力、150問を解く集中力、マークシートのテストテイキング・スキルなど、語彙力とは異なる能力の問題で低得点になった可能性もある。さまざまな要因が考えられるが、これらの問題を追究するには、語彙サイズテストの実施だけでなく、読解力の測定結果と比較するなど、ほかの手法も含んだ新たな調査が必要である。

難度を上げることも含め語彙サイズテストそのものに関すること以外の今後の方向性としては、今回の一般語彙の枠を超えて、学術語彙、漢字の知識を測るテストを作成することを目指していく予定である。専門用語に関して

は大学での専門教育課程で勉強していくものであろうが、専門分野に関わらない一般的な学術的語彙というものも存在する。読書量の少ない大学生であれば、一般学術語彙に問題のある者もいるかもしれず、一般語彙では問題ないが学術語彙になると問題があるという学生のケースも考えられる。また、大学での使用を考えれば、一般語彙のテストよりも学術語彙のテストのほうがニーズはあるかもしれない。以上のような理由で、学術語彙テストの開発は有効だろう。既に松下によりまとめられた「日本語学術共通語彙リスト」<sup>(20)</sup>もあるので、語彙サイズテストと同じ要領で開発し、検証を行えばよい。また、漢字力は語彙力、読解力との関連が強いと考えられる。一般語彙のテストより簡便に日本語力を測れるテストとして、漢字テストの開発も教育・研究に貢献するものとなるのではないか。

一般語彙テスト、学術語彙、漢字の3種の語彙に関するテストができあがれば、大学生の抱える語彙力の問題をよりきめ細かく調査することが可能になるだろう。さらに、語彙量と他の力との関係を明らかにする調査にも利用できる。語彙量と読解力、文章力、あるいは外国語能力などがどのように関係するのか、あるいは関係はないのか、実証的な解明に役立つツールとなるだろう。

もう一つの方向性として、語彙サイズテストができあがれば、それを日本語母語話者の発達段階にそって語彙量を測定することに使いたいと考えている。最近のリメディアル教育などの動向を見ると、高等教育での問題に加えて、初等・中等教育の現状・問題が話題になる。2014年度日本リメディアル教育学会全国大会のラウンドテーブルでは、初等・中等教育の国語教育が取り上げられていた。<sup>(21)</sup>たとえば、何歳で何語程度の語彙を習得していくのか、どの段階で個人差が大きくなるのか、大学で語彙量はどれほど伸びるのかといったことが明らかになれば、高等教育には大いに資するところがあるのではないだろうか。



の語彙テスト開発」(課題番号15K02631, 平成27年度~29年度, 研究代表者: 佐藤尚子)の助成を受けた。

[注]

- [1] 「日本国語大辞典第二版」(小学館)の収録語数による。
- [2] 日本語能力試験は2010年に改定され, 現在はこのような語彙の目安は示されていない。
- [3] テストの解答用紙に年齢記載のなかった18名を除外して計算している。
- [4] 上記と同様に, 性別記載のなかった1名を除外して計算している。

[引用・参考文献]

- (1) 文化庁 平成25年度「国語に関する世論調査」の結果について: [http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/yoronchousa/h25/pdf/h25\\_chosa\\_kekka.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h25/pdf/h25_chosa_kekka.pdf) (2015年8月17日参照)
- (2) 文化庁 平成21年度「国語に関する世論調査」の結果について: [http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/yoronchousa/h21/pdf/h21\\_chosa\\_kekka.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h21/pdf/h21_chosa_kekka.pdf) (2015年8月17日参照)
- (3) 文部科学省 学校基本調査: [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm) (2015年8月19日参照)
- (4) 全国大学生生活協同組合連合会: CAMPUS LIFE DATA 2014 (第50回学生の消費生活に関する実態調査報告書), 2015, p. 13.
- (5) 橋本美香, 見尾久美恵: 初年次教育におけるNIEの導入(「文章表現」での取り組み), 日本NIE学会誌, 2012, 7号, p. 103-110.
- (6) 澤口真理, 瀬戸美奈子: 高校生の文章読解における課題について(日本語能力の観点から), 三重大学教育学部研究紀要, 2015, 66巻, p. 165-170.
- (7) 日本語部会シンポジウム: 学士課程で必要な語彙理解力の育成のために, 日本リメディアル教育学会第5回全国大会発表予稿集, 2009年9月, 千歳科学技術大学, p. 5-18.
- (8) 日本リメディアル教育学会: 日本語リメディアル教育とは, リメディアル教育研究, 2011, 6巻1号, p. 3-46.
- (9) 学ぶ人のための基礎教養講座 ManaJin IRT 診断テスト <https://manajin.info/irt/> (2015年8月19日参照)
- (10) 橋本美香, 山口恒夫, 兵藤文則: 川崎医療短期大学における語彙力に関する

- 調査, 川崎医療短期大学紀要, 2010, 30号, p. 9-15.
- (11) 長尾佳代子: 大阪体育大学における日本語作文指導, リメディアル教育研究, 2013, 8巻2号, p. 203-210.
  - (12) 田島ますみ: 大学生の日本語語彙力に対する自己評価, 中央学院大学人間・自然論叢, 2014, 38号, p. 75-94.
  - (13) 国際交流基金: 日本語能力試験 出題基準 [改定版], 凡人社, 2002.
  - (14) 松下達彦: 「日本語を読むための語彙量テスト」の開発, 2012年日本語教育国際研究大会予稿集第一分冊, 2012, 日本語教育学会, p. 310.
  - (15) 松下達彦: 日本語を読むための語彙データベース, 2011, Ver. 1.1 : <http://tatsuma2010.web.fc2.com/> (2015年8月19日参照)
  - (16) John READ: Measuring the Vocabulary Knowledge of Second Language Learners. RELC Journal, 1988, vol. 19, No. 2, p. 12-25.
  - (17) Paul NATION & David BEGLAR: A Vocabulary Size Test, The Language Teacher, 2007, vol. 31, no. 7, p. 9-13.
  - (18) 日本語能力試験 N1～N5: 認定の目安: <http://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html> (2015年8月17日参照)
  - (19) 押尾和美, 秋元美晴, 武田明子, 阿部洋子, 高梨美穂, 柳澤好昭, 岩元隆一, 石毛順子: 新しい日本語能力試験のための語彙表作成にむけて, 国際交流基金日本語教育紀要, 2008, 4号, p. 71-86.
  - (20) 松下達彦: 日本語学術共通語彙リスト, 2011, <http://www.geocities.jp/tatsum2003/> (2015年8月19日参照)
  - (21) たなかよしこ, 福嶋隆史, 河住有希子, 小山義徳, 高松正毅, 馬場眞知子: 大学までの教育と論理的思考力・日本語力 (日本語部会・学習言語部会合同企画): 日本リメディアル教育学会第10回全国大会発表予稿集, 2014年8月, 東京電機大学, p. 10-11.